

## 春城市島謙吉先生と早稲田大学図書館

本稿は、二〇〇九年十一月二一日、新潟県新発田市の市島邸で開かれた講演会の記録である。一部加筆修正をしてあるので、当日の講演内容のままではない部分があるが、本稿をもって当日の記録とする。本文中の引用資料名は以下のとおり。

〔 〕 市島春城資料標題（春城自筆資料、貼込帖等。

早稲田大学図書館所蔵）

「 」 刊行随筆標題（詳細は本稿末尾の「市島春城刊

行随筆一覧」参照）

『 』 書名（随筆一覧、参考文献参照）

市島邸は新潟県の県指定文化財であり、本邸を所有し

た市島家は、いわゆる千町歩地主と呼ばれる江戸時代からの豪農の一つで、宗家と複数の分家からなる。市島家は丹波国にはじまり、十六世紀末に新発田に移つて以来、近代まで栄えた家柄である。現存する市島邸は市島

藤原秀之



市島邸表門（新発田市産業振興部提供）

宗家のものであり、分家筋に当たる市島成一氏が中心となつてながく管理してきたが、一九六二年に新潟県指定文化財となり、現在は新発田市の管理の下、一般公開されている。早稲田大学、特に図書館の発展に尽力した市島謙吉（春城、一八六〇—一九四四）が同じく分家の一つ、角市市島家の出身であることから、市島家と早稲田大学とは早くから交流があった。

近年新発田市では市島邸をさまざまな文化事業などの発信拠点とすべく整備を進めており、今回、早稲田大学との間の交流を市レベルでも深めてゆくべく、その一つのきっかけとして本講演会が開催された。

当日はあいにくの天候の中、八十名以上が市島邸の大広間に集まった。同日午後二時、新発田市産業振興部副部長大竹政弘氏の進行で講演会がはじまった。

大竹 本日は、お寒い中、また足元の悪いところ大勢お集まりいただき、ありがとうございます。わたくし、本日の司会進行を務めます新発田市産業振興部副部長の

大竹でございます。よろしく願います。

本日は、ここ市島邸における文化事業のひとつ、早稲田大学との連携事業として「春城市島謙吉先生と早稲田大学図書館」と題しまして、図書館の藤原秀之さんにお話いただきます。

それでは早速お話しただこうと思います。よろしくお願います。

藤原 ご紹介いただきました早稲田大学図書館の藤原です。お寒い中、いっぱいのお運びありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。図書館では特別資料室というところにおりまして、何が特別かと言いますと、資料、持っている資料に特徴があります。国宝、重要文化財、そういった貴重なものから江戸時代に広く流通した版本までの、いわゆる古典籍、古文書の類を収集、整理、公開する、そういった仕事をしております。早稲田大学図書館にはそうした特別資料が約三〇万点以上ありまして、これはかなりの数字です。なにやら自慢

話のようで恐縮ですが、実はこれらの貴重資料の多くの部分、核となる部分を集めたのが、本日お話しします早稲田大学の初代図書館長春城市島謙吉先生（以下、お話し中の敬称は略させていただきます）なのです。

今回はじめて新潟の地を訪れ、こちらの市島邸も昨日はじめて拝見いたしました。新発田の地を車でまわり、白鳥の集う広い田んぼを目にし、その豊かな稔りを中心とした経済力に育まれた歴史と文化の町だな、との感想を持ち、市島家はその中心的な存在であったことをあらためて実感しております。新発田市さんのご尽力で、この市島邸も丁寧に管理・公開され、所蔵する資料の調査も進んでいるようです。春城や市島家についてはこれまでも多くの研究があり、資料の多くが紹介されておりますが、今回、こちらで所蔵する資料を少しですが拝見し、今後の活用が期待されるものが多くあることを知りました。実に楽しみです。

本日は、そんな春城について特に私も早稲田大学との関係、図書館とのつながりについてお話ししたいと思います。

ます。

どうぞよろしくお願いします。

市島春城を知っていますか？

さて、さんざん名前を挙げて言うのもなんですが、みなさんは市島春城を知っていますか？ 今日、こちらにおいてのみなさんは大方ご存知かと思いますが、実は同じ質問を早稲田のキャンパスですると、たいいていの人知らない、と答えるというのが実情です。図書館には多くの図書館実習生や見学者が来ますが、そうした人たち、つまり図書館員だったり、図書館を目指す人たちに聞いても答えは同じです。早稲田をつくった人、という問いかけに「大隈重信」とか「大工さん」なんて答えは返ってきますが、それ以上の名前は出てきません。草創期の人物として、そうですね、坪内逍遙の名がでてくればよいほうでしょうか。あとは、高田早苗、小野梓なんてあたりが出てくれば御の字です。近年は、大学の授業で「早稲田についてもっと知ろう」という内容の講

義があり、受講生もいるようですから、少しは知名度があがっているかもしれないませんが、もつともつと春城については知ってもらいたいと思っています。

それでは市島春城とはどんな人物か、まずはその略伝から紹介しましょう（年譜参照）。

生国は越後国北蒲原郡下条（きたかんばらくんげじょう）、現在の阿賀野市です。読売新聞の主筆や地元新潟の新聞の発刊にかかわり、衆議院議員もつとめました。そして早稲田大学と名前がかわつてからの初代図書館長を十五年のながきにわたつて勤めました。今は制度上の制約もあつて、これほどながく館長をつとめる先生はいらっしゃいません。早稲田大学名誉理事、日本文庫協会会長にもなります。こちらは彼が会長の際に日本図書館協会と改められますが、これも春城らしいですね。文庫というと、江戸時代以前の藩や個人の蔵書のようなイメージですね。何と言うか一般公開されているというよりどちらかという閉鎖的、前時代的なイメージ。それが図書館という近代的な名称に変更されたのが市島会長時代だ

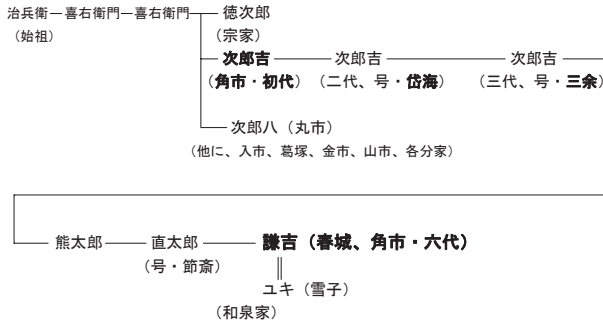
と言うのも何か象徴的です。さらに大隈の選挙参謀でもあり、随筆家、江戸文人の研究家としても成果を挙げています。

春城はその生涯の中で多くの言葉を遺してくれています。別表をご覧ください。春城が刊行した随筆集やそれに類する著作の一覧です。実はこれらの随筆にはネタ本があります。春城は日々日記をつけることを習慣としており、早稲田大学図書館には彼の日記が、ちょうど東京専門学校が出来てしばらく後のもの（明治十九年）から、最晩年までのものが、保存されています。そしてそれらとは別に毎年数冊の随筆、雑筆、貼込帖が春城の手によつて記されています。日記には、まさに日々の出来事が詳細に記されており、別の随筆は、日々思ったこと、気になった資料、新聞記事などについて、思いのままにまとめたものです。こうした中から後に刊行される随筆集のネタとなったものが多く見られます。早稲田の図書館には日記や随筆等、春城の自筆資料が約千点所蔵されています。今日は刊行された随筆やそれら自筆資料に記

された春城自身の言葉によって、彼の生涯をたどってゆくように早稲田大学図書館長としての市島春城、というより市島謙吉に焦点をあててゆきたいと思います。

略系図をご覧ください。これはこの市島邸をながく守つてくださった継志会、なかでも市島家の分家筋に当たる市島成一さんがまとめた『家廟之紙碑』にも掲載されている系図を元に作ったもので、市島宗家と春城の分家である角市市島家について簡単にまとめたものです。春城は角市の六代目にあたるのがわかります。角市という家柄は市島家の分家の中でも特に目立った人物を輩出した家でありまして、世に「文学は岱海を推し、貨殖は三余を推す」（坂口仁一郎『北越詩話』）と言われたほどです。まずは二代目の岱海、こちらは文人として大変に有名でして「岱海は要するに水原儒林空前の明星であった」（小林存『水原郷土史』）とも言われています。また、

## 市島家(角市)略系図



三余は商才に秀でており、みなさんもよくご存知だと思いますが北前船、江戸時代日本海沿岸を蝦夷、今の北海道から中国地方まで往来し、さまざまな商品流通をおこなっていた船ですが、こちらで大きな財を築き、三余の時代、市島家所有の船は「千石船四十艘の多きに及」び「帰着の時は千両箱一個を齎し来るのを通則とした」〔吾家の回漕業〕『擁炉漫筆』ということです。春城の生涯、すなわちその文人趣味、随筆家としての業績、さらには図書館長として、また大隈重信の側近としての活躍を見ますと、岱海の文人としての素養、三余の商人としての才覚を併せ持っていたのではないか、そんな感じを感じずにはいられません。

### 新潟時代

さて春城の生涯です。まずはその名前について、よく言われておりますのは、幼少期には雄之助といい、のちに謙吉と改めた、というお話です。春城自身、晩年の文章〔春城八十年の覚書〕ではそのようなことも書いてい

ますが、もつと若いときには別のことも言っています。

それが以下にあげる資料です。こちらは、さきほど申し上げた春城の日誌とは別の随筆の一つ〔無益弭紙〕の明治三十四年一月の記述です。これによると、春城の名前は、最初から謙吉であったが病弱であったため八幡宮から雄之助の名前をもらい、明治時代になってからさらに謙吉に戻した、とあります。春城自身が自らの生涯について語ることは少ないのですが、これはその貴重な実例の一つと言えるでしょう。日誌や随筆の中からこうした面白い話を探してくるのも資料を読む楽しみの一つでもあります。なお、春城の自筆資料のほとんどについて当館のホームページを通じて全文をご覧いただくことができます。古典籍総合データベースと言いますが、こちらには早稲田大学図書館が所蔵する古典籍の多くのフルテキスト、精細画像が自由にご覧いただけるようになっていきます。春城資料もほとんどがこのサイトで見るることができます。みなさんもご自宅に帰ったらご覧になってみてください。



『無益艸紙』一（明治34年1月）

話がちょっとそれましたが、そんな春城の新潟時代、生まれたのは一八六〇年（安政七）ですからまだ江戸時代ですね。当時の子供たち、学問と言えばまずは漢学で

す。論語の素読に象徴されるように、漢学を勉強するところからはじまった。ただ、「時勢の必要」（『新潟学校時代』『春城代醉録』）から春城は英語の勉強をしなくちゃならなくなる。時代が幕末から明治へと移り変わるその時、英語が必要となってくるわけです。本人は最初はあまり気が進まなかったようですが、まだ全国的に学校の制度が整備されているわけでもなく、きちんと勉強しようとするれば東京に出るしかない。東京の学校では当時、西洋人の教員を雇っており、授業は英語、というのが普通でした。ですから、まずは新潟でも英語の勉強を、というわけです。本人はあまり気が進まなかったが、しかしやったわけです。時代の流れですから。そして上京して東京の英語学校に入学、そこから開成学校、現在の東京大学に入学します。その時の同期生に生涯の友である高田早苗や坪内逍遙がいました。

当時の学生たちは演説会を開き、そこで自らの意見を公にしたり、弁論の術を鍛えるとともに、交友関係を広げていったようです。春城自ら「私共の学生時代は概し



て演説が幼稚であつた」(「演説思ひ出譚」『春城談叢』)という演説の内容を記録した資料が残っています。(「一橋大学共話会演説稿」市島謙吉演説「下等社会教育論」)これは聞書、速記録みたいなもので春城の自筆ではありませんが、当時の春城や他の学生たちの演説の様子がわかる興味深い資料です。

### 小野梓との出会い

さて、こうした学生生活をおくる中で、春城にとって人生を決する出会いが訪れます。小野梓、大隈重信との出会いです。

「若し小野先生と交はらなかつたら大隈侯とは他人であつたかも知れん。東京専門学校も或は起こらなかつた」かもしれない(「小野梓先生を憶ふ」『文墨余談』)と春城は述べています。小野梓(一八五二—一八八六)は、土佐宿毛の出身で、明治のはじめに官僚として司法省に出仕、会計検査官としても活躍します。のちに東洋館という出版社を興しますが、こちらは小野の没後、富山房へ

と継承されます。この書店からは吉田東伍の『大日本地名辞書』が刊行されるなど、早稲田とも関係の深いところ です。

小野は大隈の知恵袋であり、また手足でもありました。大隈がこうしたい、と思えばその実現にむけた具体策を立案し、人を集めました。政府の中では少数派である佐賀出身の大隈が、自らの手足となる若い人材を集めようと思ひ、小野にその人選を任せました。小野は自らの知人、友人をたより当時の東京大学学生の中から何人かを自邸に招き、話を聞きます。春城たちもそうした中で見い出されていったのです。のちに大隈が組織する立憲改進党の中心となる若手政治集団は、小野の自邸のあった場所が隅田川の渡し場近くにあったことから「鷗渡会」と名づけられ、大隈の思いを実現するために活動の幅を拡げてゆきます。

そこで大隈です。彼については今更多くの説明は不要でしょう。今も申し上げましたように佐賀出身の志士、政治家ですね。市島は彼の影響を受けるばかりではなく、



若くして亡くなった小野梓の後を継ぐように、大隈の思いを支え、実現してゆきました。市島は、「大隈侯に紹介され（中略）侯に附随して四十年の長きどんな高等教育も及ばぬ大なる薰陶を受け」たと言っています（「小野梓先生を憶ふ」『文墨余談』）。

時の政府は伊藤博文、黒田清隆といった薩長勢力が中心でして、大隈は少数派。何かと対立することもあったようです。時代はまさに自由民権運動が盛んになってきた頃、国会開設の時期をめぐって民権派の活動もピークを迎えようとしていました。政府内でも急進的な大隈は漸進派の伊藤らと対立、東京を離れていたときに、突如参議の職を解かれてしまいます。世に言う「明治十四年の政変」ですね。これで大隈が下野したのに呼応するかのように、市島は卒業を控えていたにもかかわらず退学して、大隈のもとでの政治活動に専心することになります。高田や坪内は卒業していますし、なぜここで市島だけ中退してしまったのか、経済的な理由もあったようですが、やはりそこは彼なりのケジメのつけ方だったので

しょう。

ここからの春城をひとことで表現すると「ジャーナリスト・市島謙吉」です。

ジャーナリスト・市島謙吉

大学を辞めた春城は、まずは新潟に戻り、一八八三年（明治十六）『高田新聞』を創刊し、活動を開始します。折りしも同年三月、新潟県頸城の自由黨員が一斉検挙されるという事件がおきました（高田事件）。市島はこれに對し、当然のように批判記事を掲載します。自由党と立憲改進黨、普段は対立することはあっても、政府という共通の敵に対しては共同戦線を張ったわけですね。ところがこれがいけなかった。高田新聞社長の市島は逮捕され、禁錮刑に処せられます。当時、言論統制は厳しくなっており、新聞紙条例は「明治十六年に至り、水も漏らさぬ厳密な改正を加」えていた（獄窓旧夢談「回顧録」）と市島は述べていますが、まさにその恰好の餌食となったわけです。ただ、そんな獄中にあっても春城はムダに時

を過ごしていません。そのときの体験を随筆に掲載し、のちには『獄政論』として監獄制度に関する自らの考えをまとめます。こんなところにも文筆家・市島春城の面目躍如といった感があります。

出獄後東京にあつて開校間もない東京専門学校、今の早稲田大学ですね、その運営にも関与していましたが、しばらくしてから再び新潟に戻ることになります。これは当初の目的である新潟における党勢の拡大、そのため内地盤作りのためでしたが、ただ、すぐには行きたくなかったようです。学校のことにも気になるし、加えて一八八六年（明治十九）には、市島たちの精神的支柱であり、行動の規範であつた小野梓が亡くなります。そんな中で新潟行きでしたから、いくら大隈と高田からの進めであつても即答はできなかつた。ただ、結局行くんですね。「北越ハ余力郷土ニシテ知人少ナカラズ、余ノ到ル或ハ我政族ノ為シテ便ナラン」（菰月蘋風楼日録）二、明治十九年三月（二七日）と言っている。新潟では今度は新潟新聞の主筆として健筆を揮うわけですが、そんな中で第一

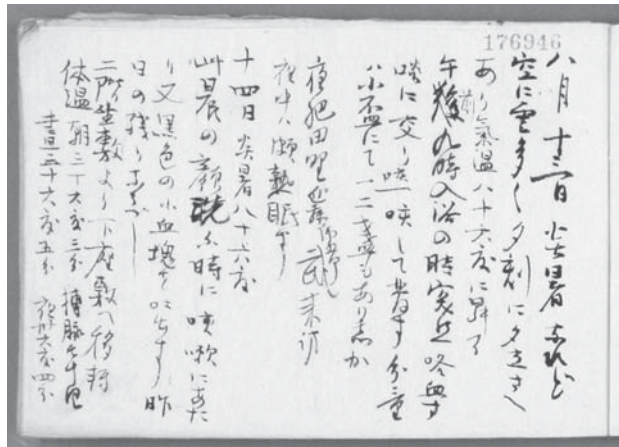
回の衆議院議員選挙がおこなわれます。市島も立憲改進党から立候補、しかし惜しくも落選してしまいます。新潟二区（東・北蒲原郡、岩船郡）で次点というのが選挙結果です。このとき埼玉二区で当選したのが高田早苗で、選挙後市島は、高田の後を継いで読売新聞の主筆となるべく上京します。そして第二回、第三回の選挙にも立候補しますがいずれも議席を得るにはいたりません。春城は第二回の敗因を「言論の梗塞は此の時より甚だしきは無かつた」（『揺籃時代の議會』「回顧録」）と述べています。また第三回については「投票に勝ち、資格の闕に敗る」（『蹄塵録』）と言っていますが、これは当時の選挙制度を背景にしています。当時はまだ普通選挙、つまり一定の年令に達すれば誰もが選挙権、被選挙権を得られるという時代ではありません。相応の納税額のあること、これが選挙、被選挙権を得るための大きな要因でした。この納税額の算出法について、市島側の理解と役所の考えにズレがあり、結果的に市島は被選挙権なし、という結論により議席を得ることができませんでした。それでも投

票はされたようで市島側の発表では選挙区内で最高の票を得たことになっています。ただ公式発表では得票数でも次点ということになっていますから、事実のほどは藪の中、といった感じでしょう。

そんな悔しい思いをした市島ですが、一八九四年（明治二七）の第四回選挙で初当選します。当時三四歳、いよいよここから「政治家・市島謙吉」のながく、華々しい政治活動がはじまるはずでした。事実、足尾鋳毒事件や鉄道敷設など、多方面にわたる議案の上呈にも関与していました。思わぬ形で政治家生活にピリオドを打つことになります。

### 政界からの引退

一九〇一年（明治三四）八月、新潟に戻っていたある朝のことです。「午前九時入浴の時、突然咯血す。痰に交り咳一咳して発す」（病床日誌）。突然の咯血です。そして「此の病を機として酒烟を絶対に禁じ（中略）政治活動も医師の勧めにより爾後は廢」する（『春城八十年



『病床日誌』明治34年8月

の覚書）ことになりました。実際にはお酒は十年位で復活してしまうのですが、国会議員としての政治活動はわずか八年ほどで終わってしまいました。東大時代に小野

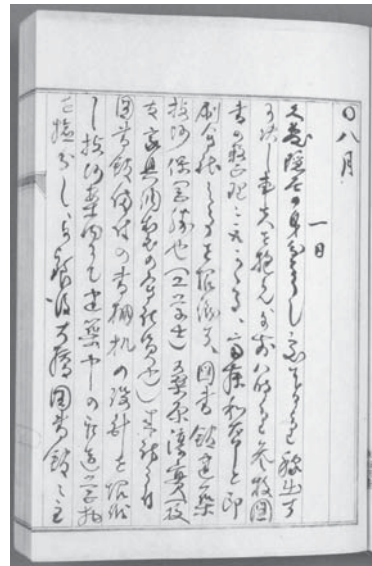
梓、大隈重信を知り、政治の道に進んだ市島としては大変に残念だったと思います。

ところで、この〔病床日誌〕ですが、咯血の日からの一ヶ月余、日々の生活の様子を克明に記しており、こんなときでもキチンと記録しているあたりが、さすがというか春城らしいな、と思わせてくれます。

### 図書館人・市島謙吉

さて、療養生活を続けていた市島に社会復帰の声をかけた人物がいます。高田早苗です。当時高田は東京専門学校の学監という職にありました。これは校長のもとで実質的に学校の運営をつかさどる立場です。ちなみにこのときの校長は鳩山和夫、鳩山由起夫首相の曾祖父にあたる人物です。その学監の高田から「君は図書館の経営に当るがよからう、静かにやれる仕事だから病後の君には適する、ヤツテ見給へ、図書館は案外趣味のあるものだ」〔図書館の建設「早稲田大学の今昔」〔随筆早稲田〕と誘われた春城、本は嫌いではなし、就任を決意します。一

春城市島謙吉先生と早稲田大学図書館



『春城日誌』明治35年8月1日

九〇二年（明治三五）のことです。この年東京専門学校は早稲田大学と改称し、新しい図書館も竣工することになっていました。それまでも図書室長や東京専門学校図書館長はいましたが、市島は早稲田大学図書館の初代館長となったわけです。この時まで春城は学校とは付かず離れず、といった関係でした。草創期から監事の職にあり、学校経営に注意を払っていました。新潟行きを躊躇したのにも、小野梓亡き後、創立間もない学校を離れるのに忍びない気持ちがあったことは前に述べました。た

だ、図書館長就任により、完全に学内の人間として学校運営、特に図書館にかかわってゆくこととなります。春城、充実の後半生のスタートです。

まずは出勤初日の日記です。「久敷隠居の身分なりし処、本日より稼出すに決し、車夫を抱え、午前八時より参校、図書の整理二取かゝる」(春城日誌)明治三五年八月一日。就任前後の日記を見ると、積極的に他の図書館を見学に行ったり、新図書館の建築現場の視察をしたり、館内で使う机や椅子といった什器決定を進めていて、実に楽しそうです。何とか新築住宅を作る楽しみとどうか、自分の城を作る楽しみのようなものかもしれないね。

一方では「実は其頃まだ図書館の管理法や西洋流の目録の編成法などを心得てゐなかつた。しかし初めから興味を以つて事に当つた」(図書館の建設「早稲田大学の今昔」『随筆早稲田』)と述べ、目録作成や規則の整備を進めています。このとき相談相手となつたのは坪内逍遙でした。

春城の図書館運営で忘れてはならないのが積極的な資

料収集です。「早大の図書館経営に当ることになつてから、保養かたがた毎日毎日図書漁りを」やった(小精廬談屑「文墨余談」と言っています。日記を見ても、「○に書を購う」とか「××に館の為の書を求む」というような記載が、本日に毎日のように記載されています。

こうした積極的な資料収集の姿勢は今のわれわれにも受け継がれています。ちよつと横道にそれますが、この頃はどちらの図書館もスペースの問題に悩まされています。書架を置くスペースがない、処理待ちの本を置くところがないという声をよく聞きます。その結果、せつかくのご寄贈の申し出を断るということも間々あるようです。

これに対し早稲田大学は他機関が断るような大口、あるいは貴重書の受入を積極的におこなっています。特に大口の寄贈というのは文字どおり玉石混淆です。ただ、何が玉で何が石か、その判断は決して今の我々だけにできることではない。選ぶ人がいて、その時代がある。さまざまな研究テーマ、価値観の変遷の中で資料の価値も変わってゆく、そう考えたとき図書館にできること、それ

は多くの資料を集め、保存し、そして公開する、ということ。今の目の前の利用者に対して、また将来使うかもしれない利用者に対して、均しく資料が、情報が届けられるよう準備するのが我々図書館のつとめです。ですからみなさん、何かそうした資料がございましたら量の多寡に関わらず早稲田にお声をかけてください。玉石混淆、できれば今現在、玉とわかるものが多ければ大変ありがたいのですが。よろしくお願いします。ちょっと脇にそれました。

ただ、春城も同じようなことを言っています。「追々亡びゆく和漢書を今集めておかないと、他日噬臍の悔が」ある（『早稲田大学の回顧』『回顧録』）。明治から戦前にかけて、多くの日本の文物が海外に流出したことはよく知られています。当時はまだ江戸時代はついこの間ですから、その時代の本と言ってもそれほど大事に思わなかったりして、随分と失われてしまったようです。実に残念なことで、春城の言うとおりです。また、個人で持つことの危うさを思い「蔵者に勧めてその寄託を受け、

特別に保護する」（『図書館の不備と其補足私案』『隨筆春城六種』）なんてことも言っています。また、自らの蔵書を図書館に収めてもいます。図書館長に就任した時の図書館の事務文書の中にその記録が残っていました（『早稲田大学図書館必要書類綴込』明治三五年）。これによると春城の蔵書のうち、約八千冊が図書館に受け入れられています。また、その調査のために、講師を勤めていた吉田東伍が手伝っています。今日おいでの皆さんはよくご存知のとおり、吉田東伍は春城の縁戚にあたり、春城によつて見い出された学者ですから、こうした時には手伝ったのでしょう。

初期の図書館、特に東京専門学校草創期の図書室は、設置にかかわった人々、教員はもとより在校生や卒業生たちが寄贈してくれた図書が中核となっています。特に新潟は、創立当時在校生の約二割が同県人であったといわれていますが、多くの図書を寄せてくれました。彼らは「同攻会」という組織をつくり、自分たちの勉強のために本を共同購入して図書館に預けてくれました。実に

うまい仕組みで徐々に教員たちも賛同、「同攻会」の印を捺した図書が、今でも図書館には数多く残っています。ありがたいことです。

春城の資料収集熱は時に予算をオーバーしました。「私が図書の購入に熱中した結果、毎年予算を超過した。(中略) 高田学監の諒解を得て、其都度資金を募つて収支の計算を合はした」ことなど思ひ起す(「思起す館長時代」「早稲田大学の今昔」「随筆早稲田」)。熱中していたら予算をオーバーしちゃった、なんて今では羨ましい限りです。どうしても早稲田に必要とあれば、予算云々などとは言つていられません、それでも普段は財布とニラメッコしながら買ってますから。ただ足りない分を自分で集めてきてしまうというのが春城のすごいところです。大抵は今でもさまざまな区切りに向けて募金をお願いしています、春城は「其都度」集めたと言うのですから大したものですよ。

それではここで春城が実際に図書館の蔵書として収集した貴重書の数々をご紹介します。

第一に曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』自筆稿本です。

江戸時代の代表的な小説家である馬琴の代表作である『八犬伝』については今更説明の必要もないでしょうが、その馬琴自筆の原稿です。これは小説家であり、演劇評論家でもある饗庭篁村(一八五五—一九二二)から購入したものです。饗庭は坪内逍遙と交流が深く、また読売新聞に勤務していたこともあって春城とも接点がありました。「私が早稲田の図書館長時代に、図らずも饗庭篁村翁から其所蔵の馬琴の遺書を譲り受け」た(「里見八犬伝に就ての追懐」「鯨肝録」とあり、また「饗庭より馬琴八犬伝第八、九輯草稿三十七冊百五十円にて購入、代金渡済、これは当分自分所有とし、図書館経済の都合を見て他日引渡すべき者也」と立替払していることもわかります。馬琴の草稿は現在、早稲田以外にも、たとえば天理図書館などでも所蔵していますが、早稲田には馬琴が失明する前後の八犬伝原稿があり、それがコレクションを大いに引き立たせています。



## 田中光顕との出会い

春城の資料収集で忘れてはならない存在が田中光顕（二八四三—一九三九）です。田中は土佐藩士として明治維新のただ中に身を置いた人物です。中岡慎太郎が坂本竜馬とともに暗殺されると、その後を継いで陸援隊を率いていました。維新後は新政府の警視總監、元老院議員、さらには宮内大臣といった重職を歴任し、伯爵となった人です。雅号を青山と称し、古書、稀覯本に対する造詣も深く、資料を収集するだけでなく、関連した随筆等も遺していますが、貴重な資料を散佚させない、死蔵させない、という思いは春城の心に通じるものがあつたようです。また、自らと同時代の維新の志士達の遺した書画の収集にも力を入れていました。

春城との出会いは、偶然というか運命的なものでした。

「札記の義疏が翁（田中）の有に帰したと聞いた（中略）複製したコピーを図書館に寄贈を請ふた処（中略）使にやつたものが間もなく戻り、その携へて来たものを見る

と、それはコピーではなく原書に熨斗をつけ、一簡を添えて贈られた（中略）「驚喜」といふ極度の喜悅は、自分の生涯にこの時初めて感じた」（「田中青山翁」『余生児戯』。「札記の義疏」というのは、現在国宝に指定されている『札記子本疏義』第五九卷断簡（唐代写本、一卷）のことです。聖武天皇の皇后である光明皇后が用いたとされる印が捺されていることから、奈良時代にはわが国にもたらされていたことがわかる、文字どおりの稀覯本です。存在は知られていたものながくその行方がわからなかつた本資料を田中が入手、求めに応じて複製をわけてくれているという情報を入手した春城が、使いをやつて請うたところ、なんと複製ではなく原本をくれた、ということです。春城でなくともビックリです。なぜ、田中はそんなことをしてくれたのか。それまで田中と春城は特に親しかつたわけではありません。むしろ知らないといったほうがいくらいです。それなのに田中は春城に、早稲田にこの貴重書を寄贈してくれたのです。その思いは、貴重な資料を個人が持つていても、それはいつ

か失われてしまう。だとすれば、きちんと管理し、ながく保存でき、そしてひろく一般に公開してくれる機関に持つてもらったほうがいいじゃないか、というただそれだけだったのではないでしょうか。そしてその思いは春城の思いとぴったりと重なっていたと言えるでしょう。ですから、これ以後、春城と田中は資料という共通の言語を通じて強い信頼関係を築いてゆくことになりま

す。田中からは『礼記』だけでなく、『玉篇』（唐代写本、

国宝）、『東大寺薬師院文書』（奈良から平安時代の古文書、重要文化財）、『維新志士遺墨』（明治維新の志士達の自筆資料）などの貴重資料が惜しげもなく寄贈されています。

最初に申し上げましたように春城は就任から十五年のながきにわたって図書館長を勤めますが、その退任にあたって田中は歌を贈っています。「愛で、守る 人しあらねば千代の書 しみのすみかとなりやはてなむ」（趣味の人田中青山伯）『春城筆語』。愛し、大事に守ろうとする心を持った人がいなければ、書物はあつという間に滅んでしまうだろう、と言う言葉です。田中が早稲田

大学図書館に対して示してくれた思いが、第一に春城との信頼関係、春城の書物を愛する心を信じてのことだということを端的にあらわしているといえるでしょう。今の我々も、なんとか春城の思いを受け継ぎ、田中の期待に応えられるような図書館であり続けるよう努力してまいります。

### 市島館長時代の成果

春城が館長に就任したとき、図書館の蔵書は寄託されたものを含めても三万六千冊ほどでした。それが就任から五年目の一九〇七年（明治四〇）には、蔵書数は一〇万冊を突破しています。創立から二十年かけてようやく三万冊としたものを、わずか五年でさらに三倍に増やしてしまったと言うのですから、もちろん高田早苗ら大卒の支援体制も整った上でのこととはいえ、大変なできごとです。こうして多くの貴重書とともに、いわば普通の本もたくさん集めた春城、「図書の趣味ほど多方面なものはない、一通り述べるにしても数百紙を要する」

〔「図書趣味一斑」『春城隨筆』〕と述べています。彼の図書、資料に対する強い思いが、図書館の充実を実現したと言えるでしょう。

図書館に対する彼の思いは資料収集にばかり向けられていたわけではありません。いいものをたくさん集めるだけでなく、それを広く公開する、彼はそのことにも力を注ぎました。「書物は赤裸になるのが其の使命で、深く珍藏されたり死蔵されたりしては其の使命が没了される」〔「赤俵々」『春城漫筆』〕、すなわち資料の収集とその積極的な公開です。図書館の仕事として基本中の基本と言えるでしょう。今の図書館運営にあたって、この点を外さなければ恐らくは大きく道を誤ることは無いんじゃないかな、と思います。ただこれもなかなか難しいことです。そもそも「いいもの」とは何か、早稲田大学図書館に必要な資料、早稲田大学図書館独自のコレクション、それは今の利用者、学生や研究者の皆さんが必要とするものであると同時に、将来の利用者のことも考えながら、資料を集め、公開してゆく。今の努力が将来

につながる。図書館というところは現在の利用者、未来の利用者それぞれから期待され、評価されているのです。春城はそのことを強く意識した図書館人でした。

また一方で、資料を公開するということは必然的に資料を傷めることにつながります。和紙と言うのは大変に丈夫な素材です。千年も前のものでもしっかりしています。ただ、やはり読めば傷む、これは仕方ないことです。江戸時代の小説なんかでも、めくるときの手擦れで汚れたり、切れたりしています。丁寧に扱っていてもそれは避けられないことです。あまつさえ故意に本を破いたり、切り取ったりするなんてこともあります。そうした行為を春城は「図書の敵」〔「書物の敵」『鯨肝録』〕と評して厳しく批判しています。それでは使いながら長期保存するためにはどうしたらよいか、一つの手段がさまざま複製を作ることです。春城は、「可成廉価で是非保存を要し、且つ世益なるものを会員組織で刊行」〔「国書刊行会の思ひ出」『余生児戯』〕しました。これは現在ある国書刊行会とは別のもので、大隈重信を総裁として組織されたもの

で、多くの古典籍の内容をより使いやすくするために翻刻出版するための会です。このとき出版された翻刻資料は、今でも歴史、文学の研究者にとっては重要な資料となっています。現物に触れることなく資料の内容を知り、研究を深めることの出来るこうした出版物は、今で言えばさしずめ貴重書の画像データベースと言えるでしょう。さきほど申し上げました早稲田大学図書館の古典籍総合データベースも、インターネットを通じて世界中に貴重書の情報を発信しています。春城の心を受け継ぐ試みだといってよいかもしれません。

### 趣味の人・市島春城

さて、春城の生涯もいよいよその晩年です。図書館長を辞めた後も大隈重信の選挙参謀をつとめ、さらにはその葬儀を取り仕切るなど多忙な日々を過ごしていたようですが、それでも晩年になると趣味にさく時間が増えてゆくようです。春城の趣味は実に多方面にわたっていますが主なものでも、図書（資料）に関する趣味、主に古

書・古典籍の蒐集と研究ですね、それからこれも多くのコレクションを遺している印章。古い印を蒐集したり、自分のお気に入りの篆刻家に蔵書印を作ってもらう、そうした印章に関する文章も数多く遺しています。今でも春城が持っていた印の数々が早稲田大学會津八一記念博物館に収蔵されています。それから、書簡の蒐集、これは近世、近代の名家の書簡の蒐集です。その延長線にあると言えるのが、近世文人に関する研究です。特に頼山陽については専門家と言ってよいほど調査を進め、彼の主な著書の一つ『隨筆頼山陽』は数回の改訂がなされていますが、そこには頼山陽に対する強い思い入れを感じることが出来ます。それと忘れてならない趣味が酒。一度はそのせいで人生の道筋が変わったといってもよいはずなのに、やはり好きなんです。どこで、どんな風にも飲んだら美味しいか、なんて話から、ビールはいつ飲んでも美味いというコマージュルにでもなりそうな随筆も書いています。そもそもが随筆を書くというそのことが、春城にとっては大きな趣味の一つでしょう。日々のでき

ごと、思いを綴りまとめておく、簡単なようではなかなかこれだけの質と量を書き遺すことはできません。

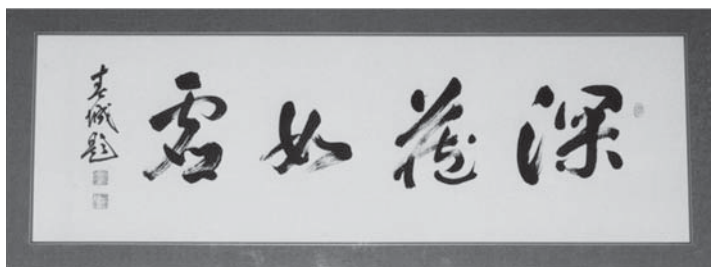
### 随筆家・市島春城

そんな随筆家・春城の言葉をいくつか紹介しましょう。「青年の頃から見聞を筆録しておく癖があり」、「日々閑さへあれば筆録を事とし」ていた（『春城随筆』はしがき）とあるように、彼の日記を見ると、本当に毎日毎日、日記をつけ、随筆を書いて暮らしていました。ある年は「本年の日録を『自娛老椽』と題署し、毎月一冊筆録を期し、歳尾迄十二冊し畢る、これ余が随筆也」（『小精廬日誌』昭和七年起居摘注）と、そんなに書いてどうするんだ、というくらいです。晩年の春城と交流のあった柳田泉は「随筆文学としてあらゆる条件を此の上なくそろへてゐる随筆といふのは、市島さんの随筆であろう」（『随筆家春城翁のおもかげ』『早稲田学報』七〇一）と述べています。刊行された随筆集が二三点（一部改定版など含む）、他に彼の言葉を伝える本もあります。（別表参照）近年随筆集

のうち半数余を復刻刊行しましたので、お近くの図書館などでもご覧いただくことができるかもしれません。どうぞご自身の目で、彼の言葉に触れてみてください。また、彼の自筆資料の多くが古典籍総合データベースで公開されていますので、そちらもあわせて参考になさってください。

### 「深蔵如虚」の精神

市島春城と早稲田大学図書館というお話してまいりました。特に本、資料に対する彼の思いが如何に深かったかという点をご理解いただけたのではないかと思います。彼は言います。「珍奇な図書は図書館に於てこそ蔵すべきで個人の手に委すべきではない。天下に一ありて二なき珍書などは図書館にあつてこそ永久に保護され、且つ役立つわけだ」、「今日のごとく図書館に備へ付きたい様なものがどしどし個人の手に移り、それが追々失てゆくのは如何にも遺憾なことである」（『図書館で取扱はぬ図書類』『小精廬随筆』）。この言葉には図書館の役割



市島春城「深蔵如虚」

が極めて明瞭に示されています。珍奇な図書に限らず、図書、資料を収集し保存する、それを広く公開し人びとの役立つようにする、そうした場所が図書館である、ということでしょう。そしてもう一つ、彼の遺した言葉に「深蔵如虚」という言葉があります。「深く蔵して虚しきがごとし」。

ておいて見えないようにしてあるもので、君子もその容貌はあたかも愚か者のようである」というような用例があります。春城がこの言葉を使うとちよつと違う意味にもとれます。すなわち、どんなに貴重なもの、高価なものでも大事にしまっておくばかりでは無いのと同じ、死蔵である。広く公開してこそ意味があり、そのための収集、保存、公開の場として図書館がある、そんな意味に使っているように思えてなりません。今図書館で働く私自身、常にこの言葉とともにありたいと思っています。春城の言葉として最後にあげるのは図書館二十五快です。これは図書館運営にあたっていた当時を思い、その時愉快に思った出来事を箇条書きにしたものです。

新館が出来たとき、図書費が増えたとき、からはじまり、安く良い本を入手したとき、多くの本の中に貴重書を発見したとき、年月を要した目録が完成したとき、分類法に新工夫ができたとき、よい展示ができたとき、多くの利用者があつたとき、などなど、いずれも今の図書館員にとつてもうれしいことばかりです。ただいずれも

図書館員の努力と周囲の理解がなくてはできないことです。そのために我々は図書館のあるべき姿、それぞれの図書館を特徴づけるような良い資料を収集し、それを積極的に公開してゆかなくてはならないのだということを、春城の言葉に触れながら改めて感じました。

春城の思いを受け継ぐために

先年、市島宗家より早稲田大学に対し東京にある別邸をご寄贈いただきました。あらためて御礼申し上げます。そちらには現在学生寮が建てられ、早稲田で学ぶ人々のために使われています。また、二〇一〇年の生誕一五〇年に向け、いくつかの記念事業も計画されています。銅像の設置（早稲田大学図書館、新発田市市島邸）、記念展示の開催、『図書館紀要』特集号（本誌）の刊行、などです。楽しみにしていってください。

春城は早稲田大学と新潟県の古く、強い結びつきの象徴的な存在です。その生涯を検証し、顕彰することは双

春城市島謙吉先生と早稲田大学図書館



講演会場風景（新発田市産業振興部提供）

「深蔵如虚」の思いをさらに具体化するための努力、つまり広くかつ特徴のある資料収集と、積極的な公開を進めてゆく必要があります。

一方で郷土である当地、新潟のみなさんをお願いしたいことがあります。それは今回の講演会のような特別な機会に顕彰するだけで終わらせないで欲しい、というこ

方にとって今後さらに大切なことでしょ  
う。それでは、  
そのために私  
たちにはなに  
ができるか、  
考えてみま  
しょう。まず  
早稲田大学、  
特に図書館で  
すが、彼の



とです。春城について、故郷である新潟の地でながく正確に伝えてゆくために、息の長い調査・研究を続けていつて欲しいのです。何と言ってもこちらは彼の原点であり、育った環境について実地調査ができる強みがあります。その上に早稲田が所蔵する自筆資料の情報を加味することで、単に郷土の偉人として祀り上げるのではなく、近代史上に果たした役割をしっかりと認識することができるのではないのでしょうか。これからの春城研究は、早稲田大学と新潟県が協力することで、大きく、継続性の有る成果を生み出すことができるのではないかと思えます。「市島春城」というキーワードが生み出す新しい力に期待しつつ本日のお話を終えたいと思います。ありがとうございました。

### ○市島春城「図書館二十五快」

〔古書あざりと図書館生活〕〔春城随筆〕

自分は曾て図書館を管理した時、書物を愛するに愉快を覚える場合を数へ立て、見たことがある。(中略)即

ち試みに二十五快を左に列挙する。

- 一、新館完成の時。
- 一、不時に図書費の収入を得た時。
- 一、数年を要した写本の成りたる時。
- 一、図書の数、十万を突破の都度。
- 一、紛失の図書の発見された時。
- 一、修理成りたる製本に題簽を録する時。
- 一、不備を感じた図書の備はつた時。
- 一、会心の陳列を為し観者を喜ばしめた時。
- 一、図書調べの結果一冊の「缺」もなき場合。
- 一、他館に無き稀覯の書を得た時。
- 一、管理法、分類法等に新工夫を得た時。
- 一、近火に災を免かれた時。
- 一、年度末に顕著な成績を発表し得た時。
- 一、図書費の増額を得た時。
- 一、数年を費した目録カードの脱稿した時。
- 一、図書整理に段落を告げた時。
- 一、缺本の完本となつた時。

一、雑本より貴重書を発見した時。

一、新購書に蔵印を捺す時。

一、廉価に佳書を購入ひ得た時。

一、練達の館員（司書）を得た時。

一、館本の他館本に比し優りたる時。

一、佳本の寄贈、寄託を得た時。

一、閲覧者満員竝に図書の収獲多き日。

一、或重要事件に館本の大なる働きをなした時。

#### 主な参考文献

市島成一『家廟之紙碑』増補版（継志会、一九六五年）

坂口仁一郎『北越詩話』（目黒甚七、一九一八年）

農政調査会「市島家文書」（新潟県大地主所蔵文書）、一九

六〇年）

春城日誌研究会「翻刻 春城日誌」（早稲田大学図書館紀

要）二六（五七）

金子宏二「春城・市島謙吉」（『早稲田フォーラム』五七、

五八、一九八九年）

藤原秀之「解説と解題」（『市島春城随筆集』十一、クレス  
出版、一九九六年）

（ふじわら ひでゆき 資料管理課長）

市島春城略年譜

西 暦	和 暦	事 項
1860	安政 7	2月17日、越後国北蒲原郡下条村に生まれる。父、直太郎（通称・次郎吉、号・節斎）。謙吉、幼少時は一時雄之助を名乗る。
1872	明治 5	新潟英学校入学。
1875	明治 8	上京。
1878	明治11	東京大学に進学。同期に、高田早苗、坪内雄蔵（逍遙）、山田一郎ら。当時流行の学生たちの演説会等を通じて、天野為之たちとも知り合う。
1881	明治14	小川為次郎、高田早苗を通じて小野梓を知り、さらに大隈重信の知遇を得る 「明治十四年の政変」により大隈重信が下野。12月東京大学退学を申請。（翌年1月受理）
1882	明治15	4月、立憲改進黨結成に参加。 10月21日、東京専門学校（現在の早稲田大学）開校。
1883	明治16	新潟に戻り「高田新聞」発刊し、改進黨系の論陣をはる。新聞紙条例に触れ、投獄。
1885	明治18	出獄後、上京。
1890	明治23	第一回衆議院議員選挙出馬（新潟2区）、次点。選挙後、上京、「読売新聞」主筆となる。
1894	明治27	第4回衆議院議員選挙出馬、初当選。
1901	明治34	8月、咯血、政治の一線から退く決意をする。
1902	明治35	10月、東京専門学校が早稲田大学に改称。高田早苗の勧めで、早稲田大学図書館初代館長となる。
1905	明治38	国書刊行会創設。
1907	明治40	日本文庫協会（翌年、日本図書館協会となる）会長。
1915	大正 4	大隈重信の後援会長として選挙戦を戦う。 高田早苗名誉学長、坪内逍遙名誉教授、市島謙吉名誉理事。
1917	大正 6	図書館長辞任。
1921	大正10	『蟹の泡 奇談一五〇篇』出版。以後、随筆家としての活動盛んになる。
1922	大正11	大隈重信逝去。国民葬を葬儀委員会総務として取り仕切る。
1944	昭和19	4月21日、逝去、享年84、文星院釈春城。墓所は新潟県新発田市五十公野の浄念寺。

市島春城刊行随筆一覧

〈随筆集〉

書名	出版社	出版年月	※
蟹の泡 奇談一五〇篇	早稲田大学出版部	1921. 12	
芸苑一夕話 (上・下)	早稲田大学出版部	1922. 04	
随筆頼山陽 初版	早稲田大学出版部	1925. 03	
随筆頼山陽 訂正増補版	早稲田大学出版部	1926. 06	第1巻
春城随筆	早稲田大学出版部	1926. 12	
漫談明治初年 (同好史談会 編)	春陽堂	1927. 01	第5巻
随筆春城六種	早稲田大学出版部	1927. 08	
春城筆語	早稲田大学出版部	1928. 08	
春城漫筆	早稲田大学出版部	1929. 12	
春城漫談 (乾・坤)	市島謙吉 編刊 (非売品)	1931. 10	
小精廬雑筆	ブツクドム社	1933. 11	第2巻
春城代酔録	中央公論社	1933. 12	第3巻
文墨余談	翰墨同好会・南有書院	1935. 08	第5巻
随筆早稲田	翰墨同好会・南有書院	1935. 09	第4巻
文人墨客を語る	翰墨同好会・南有書院	1935. 12	第6巻
春城閑話	健文社	1936. 02	第8巻
擁炉漫筆	書物展望社	1936. 03	第7巻
随筆頼山陽 改訂決定版	翰墨同好会・南有書院	1936. 06	
鯨肝録 (学芸随筆5)	東苑書房	1936. 12	第9巻
余生児戯	富山房	1939. 11	第10巻
回顧録 (市島春城選集1)	中央公論社	1941. 03	第11巻
春城談叢	千歳書房	1942. 08	第11巻
随筆頼山陽 (市島春城選集2)	中央公論社	1942. 11	

※『市島春城随筆集』(クレス出版、1996年)の巻次

〈随筆ではないが春城の言葉を伝えるもの〉

書名	出版社	出版年
大隈侯一言一行	早稲田大学出版部	1922. 02
半峰・春城・逍遙三翁 熱海漫談 (薄田斬雲 編著)	富士書房 (春陽堂発売)	1929. 10
半峰・春城・逍遙三翁漫談 (薄田斬雲 編著)	富士書房	1930. 08
熱海を語る 逍遙・半峰・春城 三翁座談録 (薄田斬雲編)	温泉旅館聚楽：熱海	1936. 07
春城八十年の覚書	早稲田大学図書館編刊	1965. 05

〈近年刊行された復刻版など〉

書名	出版社	出版年
市島春城古書談叢 (日本書誌学大系3)	青裳堂書店	1978. 08
半峰・春城・逍遙三翁 熱海漫談 (覆刻版)	鳴沢文庫：熱海	1982. 11
市島春城随筆集 全11巻	クレス出版	1996. 05
春城師友録 (知の自由人叢書)	国書刊行会	2006. 04